

# 公孫樹

東京都立  
豊多摩高等学校  
令和5年12月  
第62号  
東京都杉並区  
成田西2-6-18  
TEL 03(3393)1331



## 「豊多摩版わらしべ長者の巻」

学校長 板倉 和則

十一月のある朝のこと、校門でいつも挨拶を交わす近所さんに銀杏(ぎんなん)を配っておりましたら、たいそう喜んでくれた方がいらっしやいましたね。実は去年もいただいた銀杏、感動したんですよと言っておられました。

それは、井の頭通りから入る道の両側など近隣の皆さんに、私の書いた手紙を添えてお配りした銀杏についてのことでした。校友会や一年生にお願ひして配ってもらったのです。その方は、こういうやり方もあるのかと心に残ったので、そのことをSNSに上げたのだそうです。そして、千件以上の「いいね」を貰ったんですって。いつもお騒がせして、ご迷惑をおかけしています。と言うと、何が迷惑なものでか? 若い人は元気がなくちゃ。と、豊多摩のことを褒めてくださいました。最近嫌な世の中だから、難しいことを言う人もいっぱいいるでしょ? ここに三十年以上住んでいるけど、豊多摩はいいよ。応援してるよ。校長先生、大きな声出して喉が渇いたら飲んでよ、と励ましの言葉とともにペットボトルのお茶をくださったのです。



普段、何気なくすれ違う人たちの中にも、豊多摩のことを応援してくれている人がいます。きっと思った以上に。こうして校長はますます元気になったんだとさ。

Touch the Sky! TOYOTAMA!

## 「自転車とヘルメット、安全のために」

副校長 昆野 弘幸

今から七年前、一台の自転車を買いました。私は中学生のとき以来、長らく自転車を所有していませんでしたが、自宅の近場に用事があるときに自転車を使うと便利かなどそのときふと思ひ、買うことにしたのです。乗れさえすれば何でもよいから安価なシティサイクルでも、と。そのことを当時の職場でポロツと話したところ、たまたま私の周囲にいた同僚の先生たちが「スポーツバイク乗り」ばかりだったため、クロスバイクだのロードバイクだのを強く勧められました。最初は「そんなの必要ない」と拒んでいましたが、話を聞いているうちに少しずつ自転車に関心をもつようになり、ちょっと値の張るクロスバイクをつい入手してしまいました。

自転車などまったく興味のなかった私ですが、買ったからには長距離のサイクリングをしてみようと思ひ立ちました。そして数日後には早速、自宅から多摩川の丸子橋(大田区・川崎市)まで移動し、そこから多摩川サイクリングロードを北上してみることにしたのです。丸子橋を起点に少し行けるところまで行って帰ろうと思

っていましたが、クロスバイクの性能は素晴らしく、乗り心地もよく、気がついたらサイクリングロードの終点の羽村堰(羽村市)までたどり着いてしまいました。自宅から羽村堰までの往復、九時間ほどかけて百キロ近くも走行したことになります。このロングライドは楽しい思い出ではありますが、車道を自動車と並んで走っているときに怖い思いをしたり、段差のある道路を横切るときにバランスを崩したりと、ヒヤリとする場面にも遭遇しました。

現在、改正道路交通法の施行により、自転車利用者のヘルメット着用が努力義務となっています。自転車の運転は危険を伴い、注意を要するために法改正がなされました。事故に遭ったときに頭部を保護することの重要性は、データ上でも明らかになっています。自転車に乗る際はぜひヘルメットを着用するようにしてほしいと思います。安全のために、自分の生命を守るために。



## 「記念祭を終えて」

生徒保健部 倉本 幸之介

今年度の記念祭は、『始祭復燃〜君といっしょに〜』をスローガンに、九月九日(土)、九月十日(日)に開催されました。豊多摩大賞は、三年A組の演劇「時をかける少女」が選出され、最高学年の底力を発揮しました。開催にあたり、保護者の皆様、PTA、同窓会、おやじの会及び本校関係者の皆様には、ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

今年度は、二〇一九年以来、四年ぶりに一般公開とい

う形で開催することができました。スローガンにある「始祭復燃」の言葉には、コロナ流行以前の形で記念祭を再び、という強い思いが込められていたと思います。

そして、記念祭実行委員が発足した四月から、総長・副総長・各局キャップを中心に、話し合いを重ね、準備を進めてきました。四年ぶりとなる飲食団体の出店や中夜祭の開催は、可能な限り生徒の希望に沿った形で実施させてあげたいと思う一面、予測困難な九月の感染状況など、不安を感じながら準備を進めてきました。実行委員やクラス係も、コロナの流行前とも、昨年度とも異なる状況下で、準備を進めていかななくてはならず、楽しみだけでなく戸惑いや不安も入り混じっていたと思います。

夏休みが明け、本格的に準備が進むと、装飾やポスター・看板などに、創意工夫がみられ、記念祭に対するみなさんの熱や意気込みを感じました。こうしたみなさんの努力もあり、当日は二日間で五四〇〇人をこえる来校者を迎え、コロナ流行前を凌駕する活気ある記念祭となったのではないのでしょうか。

担当者として、今年度の記念祭を通して感じたことは、「日常や当たり前の環境を大切にしたい」ということです。準備を進めていく中で、私は様々な質問を受けました。その中には、コロナによって文化祭の経験がなかったため、以前であれば当たり前であったことも、今の高校生にとっては初めてのことであり、分からないといった質問が多々ありました。そうした質問を受ける度に、コロナ以前の日常や当たり前だと思っていたことは、そこではなかったのだなと感じました。皆さんはこれまで貴重な学生生活がコロナによって思うようにいかなかったことが多々あったと思います。だからこそ、これからは「日常」や「当たり前」を大切にしたいと思っています。

最後になりますが、準備から記念祭後の感染拡大など、課題や改善点は多々あったかと思えます。来年度以降、よりよい記念祭となりますよう、引き続きご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



「より良い体育祭に向けて……」

生徒保健部 半田 雅理

令和五年度の体育祭が九月二十二日に行われました。体育祭実行委員は四月の年度当初から少しずつ準備を行ってきましたが、六月の合唱コンクール、九月初めの記念祭と大きな行事がつづいた後の行事ということもあり、体育祭実行委員として体育祭に集中してうごく時間としては約一週間という短い期間しかありませんでした。昨年度よりも一週間早い時期の開催ということで、担当としては昨年並みに行うことができるのかどうか、心配なことだらけではありましたが、学友の集中力を昨年同様、いや昨年以上に見ることができました。「昨年のように教員や顧問の先生方が準備や運営にイニシアチブをとるのではなく、実行委員や学友自身がしっかりと主体的に考えて動いてほしい」という話をして始まっ

た体育祭だったために、当日最後の最後まで気の抜けない状況ではありましたが、実行委員も含め、係に割り当てられた部活動の学友たちが適切に動いてくれたおかげで、無事にそしてスムーズに終わることができてよかったと思っています。もっと主体的に動くことができるところや、教員のチカラを借りなければいけない所があったとしても、それは来年度以降の課題として残し、理想とする豊多摩高校らしい体育祭をめざしていければいいと思っています。

コロナ禍をこえ、新しい行事の在り方を模索している小・中・高校が多い中、豊多摩高校も特別ではなく、体育祭も含めた今後の行事の在り方を考えなくてはならない時代にきていると思いますが、昔ながらの豊多摩高校のスピリッツを残しながら、学友が主役の行事として年々、体育祭がクラスや学年・各団の団結を強めることができる、豊多摩生としての自覚を育んでいけるような行事として磨かれていけばいいと考えます。

担当としては、大きなケガやトラブルがなく最後まで体育祭ができたことと、予報されていた雨、当日の朝まで体育祭を行うかどうか悩みましたが、何とか最後の種目まで天気もってくれたことが何よりであったと思います。

学友主体とはいえ、本校の教員はじめ保護者など、豊多摩高校に関わる全ての大人のチカラがなくては体育祭を行うことができなかったと思います。この場をかりてお礼を申し上げます。本場にありがとうございました。学友諸君、本当によく頑張りました。皆さんの頑張りは勝ち負けとか関係なく、その一生懸命な姿が、見ているだけで感動をよびます。来年度以降も見ている人たちを感動させるような「より良い体育祭」に向けて、日々精進していかればと思います。